國學院大學学術情報リポジトリ

出版物紹介

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-07-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000557

出版物紹介

宗教文化教育推進センター編『解きながら学ぶ日本と世界の宗教文化』

（集広舎、2019年３月）

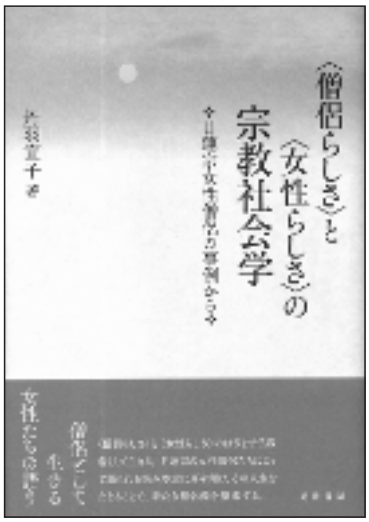
内容紹介……

日本文化研究所の連携機関である宗教文化教育推進センターが実施した、宗教文化士認定試験の既出問題から200問を選び、専門家が解説を付した。「日本の宗教」「世界の宗教」としてさまざまな宗教を取り上げるとともに、「テーマ別」として聖地、教典、戒律、神話、芸術、ジェンダー、教育、宗教研究などのテーマに関する比較宗教的な視点も取り入れられている。試験より平易な初級編（３択）、中級編（４択）も用意され、段階的に学ぶことができる。末尾には付録として統計や地図、年表などが付されている。本書の内容には日本文化研究所の研究事業「デジタル・ミュージアムの運営および日本の宗教文化の国際的研究と発信」の成果が活かされており、編集委員長を務めた井上順孝のほか、研究所から平藤喜久子、星野靖二、山中弘、櫻井義秀が編集委員として執筆・編集に加わった。

丹羽宣子『〈僧侶らしさ〉と〈女性らしさ〉の宗教社会学―日蓮宗女性僧侶の事例から―』

（晃洋書房、2019年２月）

内容紹介……

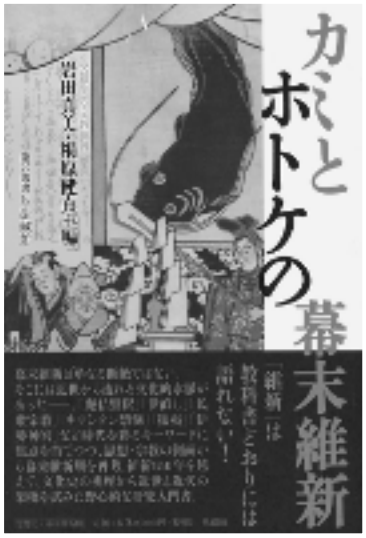


これまで女性僧侶は「世俗化した日本仏教において出家の理念を守り続ける者」として象徴的に描かれ、「伝統の守護者」あるいは「男性優位な社会で抑圧された者」としてステレオタイプ化されるのが常であった。本著はこのような女性僧侶像を否定し、女性僧侶の現実に即した議論を展開させる必要が生じていることを示そうとしたものである。本著において事例とした日蓮宗の女性僧侶たちは、社会状況や仏教に求められるものの変化を見据え、新たな僧侶像を導き出そうとしていた。明治維新後の日本仏教各宗派において進んだ事実上の出家主義の後退とは異なる道を歩んだ女性僧侶たちが、現代社会において、〈僧侶らしさ〉と〈女性らしさ〉の深い葛藤や戦略的結合のうちに新たな僧侶像を探求する姿を描く。

岩田真美、桐原健真編『カミとホトケの幕末維新――交錯する宗教世界』

（龍谷叢書46 、法蔵館、2018年11月）

内容紹介……



本書は、幕末維新期の宗教世界に焦点を合わせ、これを近世と近代を分断する転換点としてではなく、むしろ両者の結節点として捉えるという姿勢において編まれた論集である。第I部「維新とカミとホトケの語り」、第II部「新たな視座からみた「維新」」、第III部「カミとホトケにおける「維新」の射程」という３部構成で、論文12本・コラム13本が寄せられている。本書は2016年度から2018年度にかけて遂行された科学研究費基盤（Ｃ）による研究、「近代移行期における日本仏教と教化」（16K02190、研究代表者：岩田真美）の成果の一つでもあり、研究所から同科研の研究分担者を務めた星野靖二（「幕末維新期のキリスト教という「困難」」）、また林淳（「社寺領上知令の影響――「境内」の明治維新――」）、芹口真結子（「コラム　仏教教導職の教化活動」）が寄稿している。

齋藤公太『「神国」の正統論――『神皇正統記』受容の近世・近代』

（ぺりかん社、2019年２月）

内容紹介……

南北朝時代に南朝方の公卿・北畠親房によって著わされた『神皇正統記』は、神代から後村上天皇に至る日本の歴史を叙述した史論である。多分に南北朝期の歴史的状況を反映した内容であるにも関わらず、同書は時代を超えて詠み継がれていった。著者の博士論文に基づく本書は、この『神皇正統記』の近世から明治期にかけての受容史を主題とする。

こうした受容史を探究するにあたって、本書はとりわけ「正統」という概念の解釈に着目する。「正統」は天皇の無窮の統治や三種神器などといった日本の「本来性」と結びついた概念であり、本書は『正統記』の受容史を通じて「正統」や日本の「本来性」をめぐる思想史を描き出していく。具体的には林羅山、山鹿素行、新井白石、闇斎学派、水戸学、明治国学といった思想家・学派の事例が取り上げられている。